

BOOK REVIEW

地域リハビリテーションと私

以前、ハウステンボスを設計した池田武邦氏の卒寿（90歳）の祝で対談を行ったことがある。その時に、「人生の先輩として、これからどのような生活をしていこうとお考えですか？」と聞いてみた。すると、返ってきた答えはなんと、「学び、新たなことを研鑽できるような毎日を過ごしたい！」であった。これには、とっても驚かされた。以来、筆者はこのようなスーパー老人のことを「高貴高齢者」と呼んではどうか！と提案したくらいである。

今回紹介する本『地域リハビリテーションと私』の編著者こそ、まさに「高貴高齢者」の一人であり、関係諸氏は誰もが尊敬している澤村誠志先生 87歳である。

本書は医師として、そして人として、今もなお大切に、日々の診療・活動の中心にとらえられている「地域リハビリテーションへの想い」を、まるで青年の心を持って、後に続くわれわれそしてより若い世代に伝えようと構成されている。決して遺言の体は成していない。やはりすごい迫力である。具体的には第1章から第3章に先生が米国に留学して義肢装具について修業し、帰国後に兵庫県立総合リハセンター建設、そして義肢装具に関する基盤づくりを実施されてきた経緯が記されている。そして母上の認知症介護をきっかけにして地域リハの重要性を実感され、厚生労働省老人保健課とともに全国規模での地域リハ支援システムの構築に至った過程を概説されている。さらに、第4章では加えて、地域包括ケアシステム構築が重要な命題となっ

ている今だからこそ、地域リハ支援体制がとて重要になっているのだということをわれわれ後輩に力強く喚起されている。そして着目すべきは第5章。地域包括ケアの生みの親である山口 昇先生との対談である。地域リハと地域包括ケアが目指すゴールが同じであることが初めて確認された。昔ながらの知り合いで、互いに同志的存在でありながら、このように、じっくりと自分たちの見ている方向について語られたことは恐らく今までになかったことであろう。さらに、住民主体の活動を作ってこられた大田仁史先生との対談も興味深い。その他、米満弘之先生、浜村明德先生、石川誠先生らをはじめとして澤村先生と苦楽を共にして来られた、今ではそうそうたる方々（医師・PT・OT・義肢装具士など）が人間 澤村誠志についてそれぞれの立場から寄せる想い・尊敬する気持ちがインタビューに答えた形で記載されている。第6章では若い世代の人たちに、激励のメッセージが「何事も目的を持って他人より努力すること、この努力の積み重ねで、豊かな人生が約束される」と記されている。

澤村ワールドには障害者は先生であり、課題を見つけ解決しようとする強い好奇心と努力、ともに修業する仲間の大切さがいっぱい詰まっている。地域リハで活動する多くの仲間たちのエネルギー源として、また若い世代の道標として、ぜひ、本書を通して澤村ワールドをのぞいてみられてはいかが！ご一読を。



● 澤村誠志=編著

（四六 / 352 頁 / 3,200 円＋税 / シービーアー ル / 2018 年）

評者

栗原正紀

一般社団法人是真会長崎
リハビリテーション病院
理事長・院長 / 日本リハ
ビリテーション病院・施
設協会 名誉会長、医師